



福祉見である記64

地域交流&里親周知イベント 「そらいろマルシェ」

本研究所研究員

上原 真幸（保育・児童家庭福祉）

2022年11月13日（日）に、宇城市不知火美術館・図書館前広場にて、地域交流&里親制度周知のための「そらいろマルシェ」が開催されました。

●「そらいろマルシェ」当日の様子

朝10時の開始と同時に、ハンドメイド、地元農家さんのお野菜、キッチンカー等たくさんのお店がオープンしました。チラシやSNS等で開催を知った方々や、美術館・図書館を訪れた地域の方など、大勢が集まっていました。マルシェの収益の一部は里親会に寄付されるそうです。

店舗以外にも、吹奏楽演奏や絵本の読み聞かせがあり、会場の親子が一緒に楽しむ姿がありました（写真①②）。また、クイズラリーでは、会場内に設置された里親や宇城市に関するクイズに答え、景品をゲット。景品は宇城市内のカフェから寄付されたクッキーと慈愛園養育支援センターきらきら（フォスタリング機関）からの文房具、そして里親制度に関するチラシをいただきました（写真③）。景品をいただいた場所には里親制度に関するパネル展示もあり、訪れた大人だけでなく、子どもたちにも「里親って聞いたことある？」とお話をされていました。

●「そらいろマルシェ」開催への思い —実行委員代表 今西さんからのメッセージ—

このマルシェは、里親家庭や関係機関、地域住民が“気軽に”集える、交流の場をつくりたいとの思いから、開催されました。実行委員会代表の今西美奈子さんは、ご自身も2人の里子を育てる里親さんです（写真④）。現在、熊本県里親協議会の県中央支部副支部長兼事務局員も担当されています。以下、「そらいろマルシェ」について今西さんの思いを記載します。

里親の多様化に伴い、つながり方も様々になる中、私なりに里親さん方のニーズにお応えすべく、宇城市内でマルシェを開催することにしました。周知や地域力向上、社会資源とのつながりの場づくりの小さな一歩です。新規里親への委託率向上よりも、地域力を上げて里親の孤立化を防ぐことに目を向けたいと思っています。そしてやはり同じ立ち位置にいる里親だからこそできるピアサポートが求められていると感じます。

以前に比べ、サポート機関も増え、支援の手は厚くなりました。しかし、国の方針から、虐待や障がい等を背景に持つ子ども達も里親委託となり、今後はより養育が難しいケースを養育里親が担い、疲弊していくのではないかという懸念があります。中途養育の難しさもあり、里親がモチベーションを維持していくのはなかなか困難な場合も多いです。里親を支援する応援団の構築すら里親が担う現状もあります。

これまで、里親になるのは敷居が高いけれども、里親さんのお手伝いならできるかもしれない…そのような声を幾度となく耳にしま

した。実際今回のマルシェで「自分にも支援ができる機会を待っていました」という声もありました。とてもありがたいことです。

「そらいろマルシェ」は、変化する子育てと空模様をかけて名付けました。いろんな空の色があって良いし変化もする空。晴天も雨天も悪天ではないんですよね。子育てもそう。子育ては壁だらけ。事前に準備や体調を整えても、朝にならないと読めない子どもの調子。出掛けの靴の位置がずれていただけで2時間足止めなど…！人と約束をしてもキャンセルばかりで次第に約束さえできなくなります。そんな大変な中の里親さんや保護者の皆さんに、約束（予約）無く自由に気軽に楽しんでいただける場所、そしてそれぞれが交流できる場を提供できれば嬉しいです。

「みんなで育てる、みんなが育つ」応援団も支援者も成長していけるように。謙虚な気持ちを持ちを忘れずに取り組んでいきたいと思ひます。

■「そらいろマルシェ」参加を経て－自分が できることを－

ハンドメイド作品を出店されたAさんは「いろいろな状況にある地域の子ども、世界の子どもに対して何か自分ができるかと思ひていたところに、出店のお話があった。自分ができるところで参加できて嬉しい」と仰っていました。お客さんとして参加されたBさんは「里親のことは今西さんに出会うまで全く知らなかった。今回のようなイベントがあると知るきっかけにもなるし、気軽に参加できる。小さなことだと思ひけれど、知ることや伝えることを大事にしたい」と話してくださいました。

「そらいろマルシェ」に参加し、里親家庭への支援は多様な形があつていいと改めて感じました。ただ、前提として里親家庭について関心を持ち、知ることが不可欠です。知ってこそ“自分にできること”を考える一歩につながるように思ひます。本記事が、誰かの一歩につながりますように。

写真①②



写真③



写真④

